しましまもようのないプッチ

にし　はる

ミツバチ村では、きょうも、たくさんのミツバチたちがとびまわり、おいしいハチミツをつくっていました。

ミツバチ村のハチミツは、とってもおいしいとひょうばんで、ちょうちょの町や、くまの国にもおくられていました。

ミツバチのプッチは、きょうもいっしょうけんめいはたらいていました。レンゲばたけで花から花へととびまわり、

「レンゲさん　レンゲさん　きょうもおいしいミツをありがとう～♪」

と歌いながら、レンゲのミツをあつめていました。

やがて、ミツを入れるビンがいっぱいになったので、プッチはハチミツ工場へむかおうとしました。

そのとき、

「おや、ミツバチでもないのに、ミツをあつめているやつがいるぞ。」

大きなガラガラ声が聞こえました。村のガキだいしょう、ビービでした。

「おい、そのミツをよこせよ。しましまもようがないんだから、おまえはハチじゃないにきまってる。」

そう、プッチの体には、うまれつき、しましまもようがないのです。

かなしい顔をしているプッチから、ビービはビンをとりあげました。

「これは、おれさまが工場へもっていくよ。

きょうもたくさん入っているな。おこずかいがたくさんもらえるぞ。いひひ。」

　そして、

「なにか言いたいことがあるんなら、しましまもようになってから言うんだな。あはははは」

と言って、プッチのあつめたレンゲのミツをもっていってしまいました。

　プッチはためいきをつきました。

「はあ。どうせ、ぼくなんて、ハチのできそこないなんだ。ミツをもっていかれても、しかたないや。」
と、しょんぼりして、家にかえりました。

　その夜、プッチは、だいすきなおえかきをしました。

「ぼくにしましまもようがあったらなぁ」

と言いながら、しましまもようのある自分の絵をかいてみました。

　すると、いいことを思いつきました。

「そうだ！ 体 に、しましまもようをかいてみよう！」

　プッチは、黒色のえのぐで、自分の 体 にしましまもようをかきました。

　かがみで見てみると、なかなかよくかけていました。

「よし。あしたはこれで、ビービにからかわれずにすむぞ！」

つぎの日、プッチはいつものように、レンゲばたけでミツをあつめていました。

「きょうは雨がふりそうだから、いそいであつめよう。」

するとそこに、ビービがとおりかかりました。

えのぐでしましまもようになったプッチは、ビービがなんて言うかな、と、ドキドキしましたが、いっしょうけんめい、ミツをあつめてまわりました。

ビービは、プッチのほうをじっと見て、みょうな顔をしています。

プッチは、思いきって、声をかけてみました。

「やあ、ビービ。みょうな顔して、どうしたんだい。」

すると、ビービは、びっくりして言いました。

「おや、顔がプッチににてると思ったけど、声もプッチそっくりだなあ？

でも、しましまもようがあるから、プッチじゃないし…。」

プッチは、ビービのそんなびっくりした顔を見たのがはじめてで、おかしくてたまりません。

思わず、わらいだしてしまいました。

「あっははは！」

そのとき、とつぜん、雨がザザーッとふりだしました。

プッチはそれでもおかしくて、わらいつづけました。

「あっはっはっは！」

　すると、ビービの顔が、だんだんとこわい顔になっていくのが見えました。

　そして、ビービは言いました。

「やい！おまえ、プッチじゃないか！」

　大わらいしていたプッチは、どうしてばれたのかと、びっくりしました。

　なんと、えのぐでかいたしましまもようは、雨にあらいながされて、いつもの黄色い体にもどっていたのです。

　ビービは、いつものように、プッチから、ミツの入ったビンをとりあげました。

　プッチは、かなしくて、はずかしくて、目になみだをいっぱいためて、家へにげ帰りました。

　家につくと、プッチはなきだしました。

「うわーん、どうしてぼくには、しましまもようがないんだろう。

しましまもようのある、りっぱなミツバチになりたいよう。」

　するとそのとき、とつぜん、へやの中がパアッと明るくなりました。

　見ると、テーブルの上にかざっていた１りんのレンゲの花が、まぶしく光っています。

　よく見ると、そこに、小さい女の子が立っていました。

　プッチはおそるおそるたずねました。

「きみは、だあれ…？」

　すると、女の子は、

「わたし、レンゲの花のようせい、レンレンよ。

プッチ、いつも、『ありがとうの歌』を歌ってくれて、ありがとう！」

と、ニコニコして言いました。

　レンレンは言いました。

「プッチは、しましまもようがなくても、りっぱなミツバチよ。」

「ううん、レンレン、ちがうよ。ぼくはできそこないだよ。」

　プッチがかなしそうに言うと、レンレンは、花の形をしたムシメガネのようなものをとりだしました。

「これは、レンゲについた朝つゆでつくった、レンゲレンズ。

このよで、もっともとうといものを、うつしだしてくれるのよ。」

　そう言って、レンゲレンズをプッチのほうにかざしました。そして、そのレンズをプッチにわたしました。

「ほら、見てごらんなさい。」

　プッチがそのレンズをのぞきこむと、なにかがダイヤモンドのようにキラキラとかがやいていました。

「レンレン、これは、なあに？」

「これはね、プッチ、あなたの“いのち”よ。」

「え、いのち？」

「そうよ。」

　レンレンは言いました。

「このよでもっともとうといもの、それは、いのちなの。」

　プッチはびっくりして、言いました。

「ぼくの中に、こんなきれいなものがあるの？」

「そうよ。みぃんな、ひとつずつ、かがやくいのちをもっているの。

だから、プッチは、できそこないなんかじゃないわ。」

　プッチは、うれしくなって、家の中をとびまわりました。

「すごい、すごい！

ぼくの中に、こんなきれいなものがあるなんて！

ぼくは、できそこないなんかじゃないんだ！」

「そうよ、そうよ！

さあ、プッチ、みんなのキラキラかがやくいのちも、見に行きましょうよ！

とってもきれいよ！」

「うん！」

　外の雨は、すっかりあがっていました。

　プッチとレンレンは、レンゲばたけへむかいました。

　雨があがったので、ミツバチのみんなはさっそく花から花へととびまわり、ミツをあつめていました。

「さあ、のぞいてごらんなさい。すばらしいものが見えるから！」

　レンレンはそう言って、レンゲレンズをプッチにわたしました。

　プッチは、レンゲばたけではたらいているみんなに、レンゲレンズをかざして、のぞいてみました。

　すると、みんなのむねの中に、かがやくいのちが見えました。それはまるで、レンゲのピンク色のじゅうたんにダイヤモンドをちりばめたようで、このよのものとは思えないうつくしさでした。

「すごいや！本当に、みんなのいのちがキラキラかがやいているよ！」

　そこに、

「やい、プッチ、さっきはよくもおれさまをだましてくれたな！」

と、ビービがやってきました。そして、プッチがもっていたレンゲレンズをとりあげました。

　でも、プッチはちっともこわがらないで、ニコニコしています。

　ビービがふしぎに思っていると、レンレンが言いました。

「それをプッチにかざして、のぞいてごらんなさい。」

　ビービは、小さな女の子がいるのにびっくりしましたが、レンレンの言うとおりにしてみました。

「キラキラかがやくものが見えるぞ！」

　レンレンは言(い)いました。

「プッチのいのちよ。」

　ビービはびっくりして言(い)いました。

「え？プッチのいのちだって？
できそこないのくせに、こんなにきれいなもの、もってるわけないじゃないか！」

　するとプッチは、ビービからレンゲレンズをとりもどして、言(い)いました。

「ぼく、できそこないじゃなかったんだよ、ビービ。そして、きみにも…」

　そう言(い)って、プッチはビービにレンゲレンズをかざして、のぞいてみました。

　ところが

「あっ！」

　プッチはことばをうしないました。

「え、なんだよ。どうしたんだよ。」

　ビービがレンゲレンズをプッチからとりあげてのぞいてみると、まっ黒(くろ)な石(いし)のようなものがうつっていたのです。

「え、なんだよ、これ。」

「それは、ビービの“いのち”よ。」

　レンレンがこたえました。

「キラキラしてないじゃないか！」

「そう。あなたはいつも、しごとをさぼったり、プッチをからかったりしていたから、きれいないのちに、よごれがたくさんついてしまったのよ。」

「そ、そんな…。」

　ビービは大(おお)きな声(こえ)でなきだしました。

「ウワーン、ウワーン！まっ黒(くろ)ないのちなんていやだ！おれも、キラキラないのちになりたいよう！」

　プッチは、レンレンに聞(き)きました。

「このままじゃ、ビービがかわいそうだよ。よごれをとるほうほうはないの？」

　レンレンは答(こた)えました。

「プッチ、あなたって、やさしいのね。

ほうほうは、あるわ。」

「え、ほんとうかい？」

　ビービがなきやんで、レンレンを見(み)つめました。

「ええ。

“ありがとう”の気(き)もちをもつことよ。自分(じぶん)のまわりのみぃんなに、ありがとうって言(い)うの。」

　すると、ビービは言(い)いました。

「ありがとう、なんて、おれ言(い)ったことないよ。」

　レンレンはあきれて言(い)いました。

「いのちがまっ黒(くろ)のままでいいの？」

　するとビービは、

「いやだ！

…よし、みんなにありがとうって言うぞ！」

と、きめました。

　プッチは言いました。

「じゃあまず、レンゲの花さんたちに言おうよ！」

「よ、よし！

レンゲの花さん、いつもおいしいミツをくれて、ありがとう！」

　すると、レンゲレンズにうつしだされた、ビービのまっ黒ないのちから、黒いかけらがひとつ、ポロリとおちました。

「ビービ！そのちょうしだよ！さあ、どんどんいこう。」

　プッチとビービとレンレンは、村じゅうをとびまわりました。

　工場ではたらくみんなに「おいしいハチミツを作ってくれて、ありがとう。」

　学校の先生に「べんきょうを教えてくださって、ありがとうございます。」

　ゆうびんポストに「雨の日も、風の日も、手紙をあつめてくれて、ありがとう。」

　そして、お父さん、お母さんに「ぼくをうんで、そだててくれて、ありがとう。」

「ありがとう」と言うたびに、ビービのまっ黒ないのちから、黒いかけらがポロリポロリとおちていきました。

でも、いくらありがとうを言っても、さいごのよごれがおちません。レンレンが言いました。

「だれか、だいじな人をわすれているんだわ。」

ビービはかんがえこみました。

「ありがとうを言わないといけない、だいじな人って、あとはだれだろう。

…あ！」

どうやら、だいじな人に気づいたようです。

ビービは、プッチのほうをむいて、あたまをペコリとさげて、言いました。

「プッチ！いつも、レンゲの花のミツをくれて、ありがとう。そして、ごめんな。」

すると、どうでしょう。さいごまでのこっていたよごれが、ポロリ…とおちて、キラキラとかがやくいのちがあらわれたのです。

「やったあ！」

３人は、おおよろこび。

ビービは言いました。

「おれのいのちも、みんなみたいに、きれいになったぞ！」

「うんうん、ビービ、よかったね！」

プッチも自分のことのように、よろこびました。

それいらい、しましまもようのないプッチと、ガキだいしょうのビービは、だれよりもなかのよい友(とも)だちになりました。

そして、毎日(まいにち)いっしょに、「レンゲさんありがとうの歌(うた)」を歌(うた)いながら、ミツをあつめるようになりました。

すると、ミツバチ村(むら)では、今(いま)までよりももっとおいしいハチミツができるようになりました。

レンゲレンズをのぞいてみれば、きっと、ふたつのいのちがひときわかがやいて、ミツバチ村(むら)をうつくしくかがやかせていることでしょう。